
永訣の朝

堀田マサヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永訣の朝

【著者名】

N4045H

堀田マサヒロ

【あらすじ】

現代の永訣の朝をむかえる兄妹の脚本

自転車に一人乗りしている、ヒロトとアスミ
バット・ボール・グローブが入った鞄を背負いながら公園へと向
かっている

アスミ「お兄ちゃん、『時間メール』って知ってる?」

ヒロト「なんだそれ?」

アスミ「時間メールってホームページに、たとえば3日後つて設定
したら、メールが3日後に

届くんだって」

ヒロト「つまりあれか。メールが届く時間を遅らせることができ
るのか?」

アスミ「そういうこと。面白いでしょ?」

ヒロト「まあ俺はそんなメール送る奴はいねえよ。メールはすぐ届
くからメールだろ?」

アスミ「そつかな? ちょっと口マンチックじゃない?」

ホワイトアウト

出演者・スタッフ・監督・タイトル（「永訣の朝」）を表示

自宅の屋根が写される
布団の中に眠っているアスミ

アスミ（あれ？ 私、お兄ちゃんと野球しに行つたんじゃなかつた

つけ……？）

ふすまを開けて入つてくるヒロト

ヒロト「大丈夫か！？」アスミ」

アスミ「どうしたんだっけ、私……」

ヒロト「熱中症だよ。真夏だからな。頭痛くないか……」

アスミ「そういうえば、ちょっと痛い、かも……」

ヒロト「じつとしてるよ」

アスミ「うん……」

部屋から出ていくヒロト

アスミは思い出そうとするがノイズがかかったようになり思い出せない

アスミ（公園に行く前までは覚えてるのに……）

時計を見ると8時

アスミ（「飯作らなきゃ……）

頭を押さえながら布団が起きあがるアスミ
台所に行つて、冷蔵庫から食材を出す

アスミ（野菜炒めにしようかな）

野菜を切ろうとするが、ノイズがかかったようになる

アスミ（あれ……じつすれば、いいんだっけ……）

ヒロト「おこー！」

アスミが振り返るとヒロトがいる

ヒロト「寝てろって言つただろう?」

アスミ「ごめん……」

ヒロト「……どうした?」

アスミ「……ねえ、野菜炒めってどうやって作るんだつたっけ?」

ヒロト「は? お前、料理だけは得意じゃないか。何を今更」

アスミ「わかんないの! 作り方が思い出せないの!」

ノイズがかかる

ヒロト「もういい。今日はカップ麺でも食べよつ」

アスミ「でも」

ヒロト「いいから」

カップ麺を食べる一人

3

病院からの帰り道

真夏の道路を一人で歩く

回想

医者 「アスミさんは記憶障害に陥つてます」

ヒロト「どうこうこと、ですか?」

医者 「記憶を失つている兆候があるとこつことですが、このまま
いけば昔の記憶はすべて失
われてしまいます……」

ヒロト「そんな……」

医者「仕方ないことです。もつ我々にも変えることができない。
これからは、どのよにじにうみして生きるか、しつかりと考えてください」。アスミさんは事

実上の死を迎えることにな
りますから」

アスミ「熱中症で記憶障害って聞いたことないよ?」

ヒロト「いや……お前、自転車からこけたんだよ」

アスミ「嘘」

ヒロト「ふらつとしたのがわかつたと思ったたら、そのまま道路に転
げ落ちた……」

アスミ（だから記憶がないのか……）

ヒロト「大丈夫だろうと思つてた俺が、馬鹿だつた……」

アスミ「別にお兄ちゃんは悪くなこよ。ふらふらしちやつた私が悪
いんだし……」

浮かない顔のヒロト

4

白天、夜

ヒロトが作つたチャーハンを食べ終わつた後

ヒロト「とにかくだ。もつアスミの記憶がいつ失われるかわからな
い……」

アスミ「うん……」

ヒロト「なあ。時間は限られているんだ。……何かしたいこと無い
か？ 僕、貯金崩しても

借錢しても何でもしてやるから」

アスミ「……私、もし地球が明日滅ぶとしたらね。今までの思い出

の場所に行きたいんだ」

ヒロト「……そんなんでいいのか?」

アスミ「いじよ。色んなところ行って、昔ほんな事があつたね、つて話して、『飯食べて、寝てる間に地球が滅んでくれたら良いなって』

ヒロト「……わかった。今週はお盆休みだ。俺も働く必要もないから、一緒に色々な所に行こう」

「う

アスミ「うん!」

ヒロト「……それじゃあ、飯も食つたし、寝るか

5

部屋で寝る一人

ヒロトの部屋とアスミの部屋はふすま一枚隔てた場所にある

アスミ「じゃあ。おやすみ。お兄ちゃん

ヒロト「おやすみ」

電気を消す

しばらくして、部屋の向こうからヒロトの声が聞こえる
ふすまを少し開ける

ヒロトが崩れ落ちて泣いている

ヒロト「俺のせいだ……俺のせいで、アスミが……。どうして、アスミなんだ……」

めくづくとふすまを開じるアスミ

6

小学校にアスミとヒロトがいる

ヒロト「小学校か……俺も何年ぶりだろ?」「アスミ「よく一緒に登下校したよね。お兄ちゃんはいつも寝坊して、私が怒つて先に行つち
やつて」

ヒロト「思えば、あの時からアスミはしつかり者だったな」「アスミ「お兄ちゃんは思えば、あの時から面倒くさがり屋だったね」

大通りを歩く二人

アスミ「こいつて昔、駄菓子屋じやなかつたつけ?」「ヒロト「そつだつたつけ?」「アスミ「ほら、一人でさ、ガムとか飴とか買ってさ」「ヒロト「よく覚えてるな」「アスミ「まあね」「ヒロト「今じやコンビニだもんな」「アスミ「でもお兄ちゃん、コンビニでバイトしてたじやん。よく私もからかいに行つたよ」「ヒロト「来ると絶対にせがんでたけどな、もつと安くしろって」「アスミ「良いじやん、別にさ。安くしても」

公園へ

アスミ「こいつも、よく野球したよね。小さい時から、いつも私がピッチャーで、お兄ちゃんが
バッターで……それで……」

ノイズが走る

アスミ「……思い出したい、のに……」

ヒロト「無理に思い出さなくともいいだ? ゆっくりとやつていい」
う

アスミ「でも、もう思い出せないんでしょ? ゆつくりとやつていい
言つてたんでしょう?」

ヒロト「……ああ。『めん』」

アスミ「……お兄ちゃん。もういいよ」

ヒロト「もう帰るのか?」

アスミ「違う。どうしてそんなに優しくするの? お兄ちゃん、無
理しないでよ。私、昨日泣

よ……」

ヒロト「いや、俺にはお前を支えないといけないんだ」

アスミ「どうして?」

ヒロト「大切な家族だからだ」

アスミ「でもそんなこと考えて、お兄ちゃんが泣いてるんだったら、
私、嫌だよ……」

ヒロト「いいんだ、別に」

アスミ「私に近づかない方が良いよ……。私、お兄ちゃんを不幸に
しちゃうから……」

ヒロト「アスミが不幸にならないんだったら、別に良いんだ。俺は」

アスミ「どうしてそこまでするの?」

回想

両親が離婚。父親は単身赴任している。少しでも稼ぐ為、高校を
出て工場で働くヒロト。

ヒロト「だから。大切な家族であり。大切な妹だからだ。余計なこ
と考えずに日常生活を生きれば

いいんだよ、アスミは

アスミの頭をぽんぽんと撫でる

アスミ（この事も忘れてしまうの……？ 私には、何が残るの？）

ヒロト「帰るぞ」

アスミ「こー、どー？」

ヒロト「どこって、近所の公園だぞ」

アスミ「こんなところ、あつたつけ？」

ヒロト「おい、アスミ……」

アスミ「なんか、初めて見た気がする……」

ヒロト「思い出せないのか？」

アスミ「分かんない……分かんないよ……」

トに向ぐヒロト

アスミ「どうしたの？」

ヒロト「いや……これからは一人じゃ外を歩けないな、と思つて」

アスミ「そう、だね。うん」

ヒロト「これからは一人で出かけよう」

アスミ「うん」

ヒロト（俺には聞こえてしまつた。小さな声で言つたのだ）

アスミ「……」めんね

7

自宅に戻つてきた二人

アスミ「こんな家だつたつけ、私の家つて……」

ヒロト「そうだよ。ここが俺の部屋で、そつちがアスミの部屋」

アスミ「ふーん。あ！」

ヒロトの部屋の本棚から持ち出した文庫本（宮沢賢治詩集）

アスミ「私、この詩が好きなんだ」

ヒロト「永……なんだっけ？」

アスミ「永訣の朝。宮沢賢治の妹が死んじゅう時の詩。何で持つて
るの？ この詩集」

ヒロト「わかんない。たぶん親父が買ったのかも」

アスミ「そつかあ。『けふのうちに』とおくへいつてしまふわたく
しのいもうとよ／みぞれがふ

ついおもてはへんにあかるいのだ』か……」

ヒロト（どことなく、いや、確實に、この詩は俺達を表していた。

妹が、アスミがどこか遠く

へ行ってしまう気がした）

ヒロト「アスミ」

アスミ「何？」

ヒロト「また、明日もでかけるぞ！」

アスミ「うん……ちょっとと思い出せない、けどね」

ヒロト「いや、いい！ 今度は俺の想い出を見せてやるからー！」

アスミ「いいよ」

ヒロト「行くんだ！ 絶対に行くぞー！」

アスミ「わかつてるので」

ヒロト（本当に離れていく気がして、俺は必死になつて、アスミに
呼び掛けた）

アスミ「私はもう寝るね」

ヒロト「ああ……」

アスミ「おやすみ、お兄ちゃん」

ヒロト「おやすみ」

ふすまを開けるアスミ。
そこには立ちつくすヒロト

アスミ「どうしたんですか？」
ヒロト「アスミ……俺は謝らないといけない。アスミは熱中症で倒
れて、頭を打って記憶障害
になつたんじゃない。俺がやつたんだ。俺がアスミと公園
で野球をした時、俺の打つ
た球がアスミの頭に直撃したんだ」

公園での映像
そして医者から語られる言葉

医者 「アスミさんは頭部外傷による記憶障害です。ボールの当た
り所が悪かった。余り自分
を責めないでください」

病院帰りの浮かない顔のヒロト

ヒロト「俺は正直、いつかバレるんじゃないかと思つた。でも思
出すことはなかつた。俺は
正直に言えばよかつたのに、保身に走つたんだ……。逃げ
たんだ、俺は。だから正直、
公園に来た時はいつか思い出すんじゃないか、と思つて、
冷静にいられなかつた……」

公園での言葉

ヒロト「無理に思って出でなくなってしまった。やつへつてやつてこり
う」

ヒロト「俺が泣いていたのは、自分を責めていたのもある。でも、
正直に言えない自分の弱さ
に気づいて、泣いていたんだ……」

家の言葉

ヒロト「俺のせいだ……俺のせいだ、アスミが……。どうして、ア
スミなんだ……」

泣きながら語るヒロト

ヒロト「俺は弱い……。どうしても言えなかつた……。アスミは俺
を罵るんぢやないかと思つ
て、怖くて……。俺のせいだアスミが事実上の死を迎えて
しまつことを直視できなか
つた……。でも今なら言える。俺を罵つてもいい。裏切つ
たと思つてもいい。ただ、
俺はアスミと一緒にいたかった……。親父のいない家で、
ただアスミの為に頑張つて
きた。それだけは本当だ。アスミ。アスミの人生を奪つて、
ごめん、なさい……」

泣き崩れるヒロト
アスミは答える

アスミ「アスミ、って誰、ですか？」

驚くヒロト

ヒロト「アスミ……」

アスミ「アスミって誰なんですか？」

今までのアスミとの思い出が走馬燈のように、フラッシュバックする。

そしてそれが同時に失われていく

泣き崩れる

そんな中、ヒロトはかるい感じでいつ

ヒロト「アスミは……俺の大切な妹です」

記憶を失ったアスミがヒロトを抱きしめる

アスミ「せつとアスミさんはあなたのことをわかつてくれますよ。私は兄弟ということはよく

わからないけど、あなたのよつなお兄さんなり、せつとアスミさんもわかつてくれる

と思いますよ」

ヒロト「「あなたさー」アスミ……」

アスミが立ち上がる

アスミ「優しいお兄さんですね。あなたの名前は？」

ヒロト「ヒロトです。長島広斗。妹は長島明日美と言います」

アスミ「やうですか……。アスミさんに会つてみたいですね……」

ヒロト「これが俺とアスミの『永訣の朝』となつた

回想。アスミの言葉が甦る

アスミ「『けふのうちにへとおへへにつけたしまふわたくしのいせつ
とよ／みぞれがふつておもて
はへんにあかるいのだ』」

9

ヒロト「アスミは俺と共に暮らしている。何度もアスミの事を言おう
と、アスミは思いだしてく
れない。今ではそれでも仕方ないと思える。俺が行つた結
果がこうなつてしまつたか
らだと納得させる。だがどこかでは納得、できない。納得
しようがないのだ……」

ケータイの着信音

メール受信1件

その宛先を見て息を呑むヒロト

ヒロト「どうして……」

ケータイにアスミの文字

過去の記憶のフラッシュバック

アスミ「お兄ちゃん、『時間メール』って知ってる?」

ヒロト「なんだそれ?」

アスミ「時間メールってホームページに、たとえば3日後つて設定
したら、メールが3日後に

届くんだって」

ヒロト「つまりあれか。メールが届く時間を遅らせることができるのが？」

アスミ「そういうこと。面白いでしょ？」

ヒロト「まあ俺はそんなメール送る奴はいねえよ。メールはすぐ届くからメールだろ？」

アスミ「そつかな？ ちょっと口ermanチックじゃない？」

アスミのメールを見るヒロト

アスミ「これを見る頃には私は死んでいるでしょう。なんてね。映画みたいな言葉を言う日が

来るとは思わなかつた。今、お兄ちゃんは隣の部屋で泣いています。今すぐ止めたい

けど、私にはできません……」

5のシーン回想。泣いているヒロトを見た後、ふすまを閉める

その後、アスミはケータイ電話をとりだし、メールを作成する。

暗い部屋で。

アスミ「私はお兄ちゃんの涙を見て、私がどうなつてしまいうのかわかる気がしました。映画み

たいに記憶を取り戻して、もう一度お兄ちゃんと幸せな人生を歩んでいく。そんなラ

ストではない、とわかつてしまつたんです。

だから私は時間メールで、記憶が失われないうちに、伝えておきたいことがあります。

お兄ちゃん。もう私のことを忘れて。

私はお兄ちゃんのこと忘れちゃうけど、お兄ちゃんは私

に縛られていては、きっと

幸せな人生を生きていいくことができないと思うの。だから私を忘れる努力をして欲しい

い。これが私の地球最後の日に望むことだよ。難しいと思う。でも……お願い。

私を忘れて。

これが私の最高の『愛』です。

周囲には色々言われるかもしれない。でも私の『愛』を貫き通してください。

それでは。

また気が向いたらメールするね

ヒロト「アスミ……」

ヒロト（あんな状況にもかかわらず、俺のことを物凄く思つてくれていた……。『自分には何

ができるのか』『残された人生で、何をするのか』それを考えるのは、アスミじゃな

い。俺だったんだ……。俺はアスミの遺志を継がないといけないんだ……

ヒロトの部屋にアスミが入ってくる

アスミ「ヒロトさん」

ヒロト「アスミ……本当に、ありがと」

少しの間の後

アスミ「私はアスミさんじゃないですよ。妹さんじゃないですよ」

ヒロト「いや……それでもいいんだ。言わせてくれ。アスミ」

テロップも表示する

ヒロト「ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045h/>

永訣の朝

2010年10月21日22時51分発行